

彦春町茜

文想感書誌
論本體

回終日
取

読書感想文

『国体論』

最終回

著者：茜町春彦

概要：白井聡著『国体論（集英社新書）』を少しずつ読み進めながら、感想文を投稿しました。
この記事が最終回となります。

読者対象：戦前、戦後、そしてこれからの国家体制に関心のある人

終章では、戦後日本の国家体制はアメリカの軍事戦略を維持するためであることを論じています

ちょっと引用します。

(P 316)・・・戦後に天皇制を語る際に繰り返し参照されてきた、「一木一草に天皇制がある」という中国文学者の竹内好の有名な言葉がある。この言葉は、「天皇制的なるもの」が、天皇と実際に近接・接触している政治機構上部の統治エリートのなかで発生し、社会全体に一方的に押しつけられていったのではなく、日本社会の至る所で「天皇制的なるもの」が形づくられているとの指摘である・・・しかし、「天皇制的なるもの」が仮に空気のように遍在する、すなわち日本社会の在り方を永久に規定する定めにあるのならば、その支配から逃れることをわれわれは諦めるほかないであろう。つまり、天皇制に関する一見「深い」議論は、その克服の不可能性を結論することにしばしば帰着する・・・

引用を終わります。

本当に御上意識が今でも社会全体に残っているのですかねえ、よく分かりませんが、一般の国民の意識の中にはもう殆ど無いような気がしますけどね・・・

まあ、それは兎も角として、日本の国家指導層にとって大事なことは、天皇制などではなく、アメリカ政府の意向だと思います。政治家や官僚はアメリカ政府の意向に従うために汲々としているように見えます。

思いやりがあるから予算を出しますとか、戦闘は戦闘じゃありませんとか、無茶な理屈を考え出すのに汲々としているように見えます。

米軍基地問題でも、海外派兵でも、オスプレイでも、TPPでも、原発の問題でも、官僚主導の政治のもとでは官僚に付け込まれるだけだと思います。官僚の後ろにいるのは米政府ですからね、国民は税金だけ払って黙っている、使い方は俺たち官僚が自由に決めると云うことです。

国民自身が自分たちの未来を決める権利をアメリカ政府から取り戻して、つまり国家体制を共和制に移行して、国民主権のもとで政治家を、そして官僚をコントロールする本当の民主主義体制に変えれば、こう云う問題を解決できる社会になると思うのですけどね・・・

(了)

後書き

参考文献：

次の文献を参考にしました。

- 国体論：2018年4月22日第1刷発行 白井聡著 集英社新書

C G画像：

次の画像処理ソフトウェアを使用しました。

- ArtRage 3 Studio Pro アンビエント社
- Photoshop Elements 10 アドビシステムズ株式会社

著者：

茜町春彦（あかねまちはるひこ）と申します。

2004年より活動を始めたフリーランスのライター&イラストレーターです。独自のアイデア・考察を社会に提示することをミッションとし、平等で自由な世界の構築を目指して創作活動を行なっております。また、下記WEBサイトに於いても、デジタル作品を公開しております。

- YouTube （動画共有サイト）
- Google+ （ソーシャルネットワークサービス）
- 楽天Kobo電子書籍ストア （ネットショッピングサイト）
- はてなブログ （WEBLOGサービス）
- Facebook ページ （ソーシャルネットワークサービス）
- Pixiv （イラスト投稿サイト）
- カクヨム （小説投稿サイト）
- BOOTH （物販サイト）

その他：

製品名等はメーカー等の登録商標等です。

本書は著作権法により保護されています。

2018年6月15日発行

読書感想文『国体論』最終回

<http://p.booklog.jp/book/122519>

著者：茜町春彦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akaneharu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122519>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト